Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-08-21

民俗文化・古武道の伝承活動における教歌の検討 ： 宝蔵院流槍術の歌伝書を事例として

前田，繁則
小寺，直樹
平野，恭平

(Citation)
近畿民俗,188:33-51

(Issue Date)
2022-03

(Resource Type)
journal article

(Version)
Version of Record

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/90009079

民俗文化・古武道の伝承活動における教歌の検討
－宝蔵院流槍術の歌伝書を事例として－

前田繁則
小寺直樹
平野恭平

はじめに

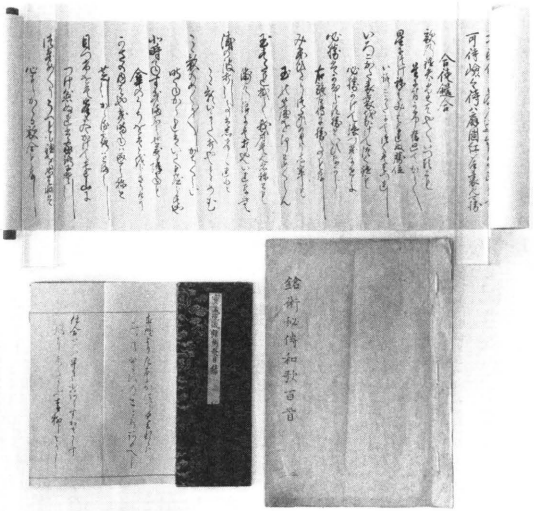
武道の伝書とは、「流儀の事理、秘事・口伝・口訣などを、正しく門弟・後学に伝えるために編集された書冊」[1]のことであり、流派の宗家から門弟へと受け継がれてきたものである。流派の伝承では、実地の稽古と口伝を基本として考え、伝書を補助的に作成・利用するということも多く、伝書のみで完全な情報を得ることができない可能性がある。しかしながら、文字によって記された伝書は、当該流派の歴史を探る貴重な手掛かりとなるものであり、それらを用いた研究は少なからずみられる[2]。

その一つが、技術論として伝書から術技や型にアプローチするものである。武道の伝書には、術技や型の解説や要諦が記述されたものもあることから、実技に関連する形で用いられてきた。例えば、現代まで伝承されている術技や型について、伝書の記述と比較し、その異同を検証することによって、変遷過程を明らかにすることや当時の理合を考えることがある[3]。また、失伝した術技や型を復元するための手掛かりとして、伝書から術技の解説や型の手順を読み解き、実技をもって復元するということもある[4]。武道の伝書に秘伝として記された術技や型の解説や要諦は、過去の当該流派の姿に迫る上で重要な意味をもっており、伝書は技術面の貴重な一次資料と位置付けられる。しかし、武道という身体的技術を文字に置き換えることには限界もあるため、伝書に記される精神的要素としての心得や心法のもつ重要性にも目が向けられることになる[5]。

それが、もう一つの精神論として伝書から流派の精神性や心法論にアプローチするものである[6]。武道では、技術面での上達にともない、単に身体的技術の向上を図るだけではなく、精神的な要素の比重が増し、自己の最高度の技が発揮される心法論が求められるようになる。また、ある程度の技量に達した者にとっては、実力の向上に限らず指導力を高めるためにも、流派の精神性や心法論が重要な意味をもつことになる。大森宣昌は、「武術伝書を、具体的記述にそって可能な限り実証的に考察し、武術の実践の場の精神性をより明確化して、武術者の真の求めた道、伝えん

とした心をたどろうと試みる」[7]ことの可能性を説いている。武道の伝書は、単に技術面だけではなく、流派の精神面を説いたものでもあることを評価しなければならない。

写真１：宝蔵院流槍術にみられる様々な形態の歌伝書



（注）：上は巻子本、左下は折本、右下は袋綴本の歌伝書である。

以上から、武道の伝書は、技術と精神の両面から流派の歴史に迫ることのできる可能性があるといえる。このような伝書の中で、本稿が注目するのは、取り上げられることの少ない歌伝書というものである（写真１）。歌伝書とは、「各流派毎に、家芸学習上の心得や要領を十首程度に、多い場合は数百種にまとめたもの」[8]であり、そこに載録された歌は教歌や道歌といわれている（以下、教歌と表記）。この教歌は、仏教や医学をはじめ、茶道や武道といった各種の芸道でみられ、短歌のもつ韻文としての特性を利用して、技芸・思想・教訓を定着させたり、それらを広く宣撫したりするものであった[9]。この教歌は、歌伝書にまとめて載録されるだけではなく、伝書の随所にキーワード風に引用されることもある[10]。このような歌伝書と教歌については、文学的なものを含めて多くの研究があるわけではないが、本稿では、一流派としての視点にはなるが、古武道の伝承活動の立場から検討してみたい[11]。

一　武道の伝書にみられる歌伝書と教歌

江戸期には、何らかの教訓・知識・秘訣のようなものを短歌形式で著すことが、ある種の流行であったとされる[12]。短歌形式での伝達は、まとまった思想を論理的に表現する上では適切ではないが、韻律をもった短い詩形に巧みにまとめられていれば、普通の文章よりも訴求力が強く、記憶

に留める上でも便利であると評価される。[13] このような教歌は、現在の茶道でも、稽古の始めに唱えたり、稽古中に指導者が教歌の一節を引用したりすることもあるといわれる。[14]

武道の歌伝書や教歌を対象とした研究は、必ずしも十分に行われてきたとはいえないが、いくつかの取り組みがみられる。今村嘉雄は、各流派の教歌約七六〇〇首を載録した『武道歌撰集』を編み、「心」の歌こそが武道の求める歌であるとして、「武道歌はあくまでも教訓性を重くみ、滑稽・諧謔・卑俗性を認めない」[15]と指摘する。また、小林勝法は、いくつかの流派の居合術の教歌を分析し、教歌をもって居合術の理念と心身の技術を伝えようとしていることを示している。[16] 教訓性や精神性が強く表れている武道の歌伝書や教歌であるが、ある程度上達した者の習熟を助けるだけではなく、経験の浅い者も含めた幅広い層に対する教育効果を狙ったものでもあったことがうかがえる。

例えば、竹内流柔術の歌伝書『竹内流心之備兵法百首』については、「いわば初心者を対象として書かれたと思われるほど素朴でしかも現実的でたいへん行き届いた学習、指導方法がよみこまれている」[17]と評されている。また、宝蔵院流槍術の歌伝書『十文字鎌兵歌百首』では、「初学の者には理解しがたい点もあろうという配慮からこの百首を作った」[18]とされている。武道の歌伝書や教歌には、個々の術技や型の細かなポイントを伝えるというよりは、術技全般に通底する要諦や意識を大きく捉えて伝えようとする傾向や、稽古や実戦に臨む姿勢や心構えといった修行者や武士としての基本的な心得を説こうとする傾向がみられる。つまり、歌伝書や教歌では、流派として術技を修得したり用いたりするのに必要な知識・心得・約束事を伝えることや理解させることに主眼が置かれていたともいえる。

しかしながら、このような歌伝書や教歌で伝えられる内容は、本来であれば、日々の稽古の中で師範や先輩から門弟や後輩へ口伝や率先垂範によって伝承されるものでもある。武道にとって、稽古という場を共有することは、単に実技の修練と伝承を行うだけではなく、教歌で詠まれるような精神面や教訓面についても学ぶ機会であり、稽古を通じて流派の総体としての伝承が行われる。[19] そのような中では、教歌は、流派として身に付けておくべき基本や精神性について、さらなる理解や定着に導くものという位置付けであり、稽古を通じた伝承を補う役割を果たしていたともいえる。

このような教歌を取り上げることは、稽古を通じた伝承が途絶えることなく続き、現在も実技と精神の双方の伝承が行われているような流派にとっては、それほど重要な意味をもたないかもしれない。しかし、伝承の重要な場とな

る稽古が一定期間途絶えた流派にとっては、重要な意味をもつ可能性がある。そのような流派では、実技は辛うじて命脈を保つことができていても、稽古という場の共有を欠く期間があり、師範や先輩から門弟や後輩への口伝や率先垂範による伝承が失われている可能性がある。失伝した術技や型については、すでにいくつもの試みが示すように、伝書に基づいて一通りの動作と手順を復元することは可能ではあるが、稽古という場を共有する中で伝承されてきた実技にまつわる非言語的情報、術技全体に通底する要諦や意識、稽古や実戦に臨む姿勢や心構えなどについては、完全に取り戻すことは容易ではない[20]。

そこで、本稿では、現在に伝承されていることを第一義としながら、歌伝書や教歌を検討することにどのような意義があるのかを考えることにしたい。以下では、具体的な事例として、近代以降に伝承が途絶えかけた宝蔵院流高田派槍術を取り上げることにする。

二　宝蔵院流高田派槍術の伝承過程

宝蔵院流槍術は、いくつもあった系派を含めて、江戸時代後期には槍術の中で最大の流派といわれたが、現在では高田派と呼ばれる一つの系派、しかも鎌槍（二・七メートル）を仕方、素槍（三・六メートル）を打方として行う槍合せの型と呼ばれる一部のみが伝承されているに過ぎない。まず、この宝蔵院流高田派槍術の伝承過程を簡単に振り返ることから始める[21]。

宝蔵院流槍術は奈良発祥の槍術であり、創始者は、興福寺子院の宝蔵院の院主であった覚禅房胤栄である。胤栄は、鎌槍と呼ばれる十文字槍の操法に独自の工夫を凝らし、宝蔵院流槍術の基礎を築いた。その後、宝蔵院流槍術は、二代目の禅栄房胤舜に受け継がれた他に、胤栄の高弟であった中村市右衛門尚政、その弟子の高田又兵衛吉次といった門弟たちにも伝えられ、彼らが中村派や高田派などの系派を起こし、日本各地へと広がっていった。

高田派を起こした高田吉次は、一五九〇年に伊賀国白樫に生まれ、一六〇三年に中村尚政に入門して宝蔵院流槍術を学び、江戸で道場を開いて大名や旗本に槍術を指南した。吉次は、一六二三年に明石藩の小笠原忠政に仕え、主家の豊前国小倉への移封に従った。吉次には四人の息子がおり、長男吉深は伊賀国に戻り上野藤堂家、次男吉和は福岡藩の黒田家、三男吉通と四男吉全は小笠原家に仕え、宝蔵院流高田派槍術を伝えた。息子たちの他にも優れた門弟がおり、宝蔵院流高田派槍術は、幕末に至るまで日本各地で術技の研鑽が積み重ねられていった。

しかし、幕末から明治にかけて、戦闘のあり方は大きく変わり、宝蔵院流槍術をはじめとする各地の槍術が消えていくことになった。その中で、宝蔵院流槍術が完全に失われなかったのは、一九一八年に旧制第一高等学校撃剣部の有志が徳川御三卿の田安家に仕えていた山里忠徳から宝蔵院流高田派槍術の指導を受け、五〇本といわれる槍合せの型を伝承されていたことが幸いした。

戦時下での中断を経て、旧制第一高等学校での活動は途絶えたが、一九六五年から、同校出身で最高裁判所長官を務めた石田和外が、戦前に宝蔵院流高田派槍術を学んでいた先輩たちの協力を得て、槍合せの型三五本の復元に成功した。失伝を免れた術技は、旧制第一高等学校出身者たちが石田の下で稽古を続けて受け継ぎ、その一人であった山崎卓を中心として東京で槍の会が発足した。その後、槍の会は忠徳会に改称し、山里より伝えられた宝蔵院流高田派槍術と一心流薙刀術の伝承活動を行っている。このようにして現代に受け継がれた宝蔵院流高田派槍術であるが、伝書の検討からは、吉次の高弟であった森平三清政綱の伝系として江戸に伝わっていたものであることが確認されている[22]。

東京で命脈を保った宝蔵院流槍術は、奈良市長で剣道家でもあった鍵田忠三郎が石田に協力を求めたことによって、発祥の地である奈良に戻ることになる。一九七六年に石田から西川源内や鍵田忠兵衛たちに槍合せの型三五本が伝授され、奈良での伝承活動が始まり、その後は大阪や名古屋にも活動が広がっていった。一九九一年には奈良宝蔵院流槍術保存会が発足し、術技の伝承活動だけではなく、流祖の顕彰や稽古槍に用いる樫の植林など、槍術文化の保存活動にも取り組んでいる。また、二〇一九年には大阪宝蔵院流槍術が発足し、術技の伝承活動を行うとともに、失伝した型の復元にも取り組んでいる。

このように、近代以降の宝蔵院流高田派槍術の伝承過程では、山里から旧制第一高等学校有志への間と、石田へと至るまでの間に二度の伝承の危機がみられた。それらの危機に際しては、稽古という場を欠くことになり、それ以前の伝書を通じた伝承も途絶えており、術技や型だけではなく、精神性や教訓性などについても少なからず失われていったと考えられる。特に二度目の危機に至る過程では、戦争を挟み長らく稽古が行われておらず、しかも型の復元に焦点があったことから、精神性や教訓性の伝承は限定的であったとみられる。

しかし、奈良での伝承活動では、実技の他に重要な動きがみられた。それは、奈良発祥の槍術として単に術技や型だけを戻して伝えようとするものではなく、地域に根差し

た伝承活動を行っていくために自らのルーツを中心に歴史性を追求しようとするものであった。その一環として、宝蔵院流槍術の伝書の調査・翻刻が行われ、成果として数冊が刊行されている。[23] 歴史性を求めようとする目的からであっても、様々な伝書に接することを通じて、流派の精神性や教訓性にも向き合うことになったと考えられる。

この伝書の調査・翻刻を行った西川は、伝承されている高田派のものに限らず、本流に当たる鎌宝蔵院流のものも取り上げている。宝蔵院流槍術は、多くの系派に分かれて発展してきたが、島田貞一によれば、胤栄の晩年の頃には流儀の大元が確立していたことから、「内容も各系統によってそれぞれ独自の工夫が加えられてはいたが、基本的には諸派ともほぼ一致したもの」[24]とされる。その意味では、本流の鎌宝蔵院流の伝書も取り上げ、そこにルーツや歴史性を求めようとしたことは理解できる。

西川の行った伝書の調査・翻刻では、鎌宝蔵院流のものであるが、歌伝書も取り上げられており、『宝蔵院流十文字鎌槍傳　鎌槍兵法百歌首』（以下、西川の翻刻を指す場合は『鎌槍兵法百歌首』と表記）として刊行されている。西川が用いた底本は、宝蔵院の寺元として流派を支えた満田家が所蔵する『鎌槍兵法初心百歌首　全』とされる。この歌伝書は、鎌宝蔵院流で五代目の乗織房胤憲の時代に稽古場執事を務めた宮城化応（別名大江多龍）が一七九〇年頃に撰集・校註したものとされており、教歌のみを載録したものと、教歌の他に各首の簡単な解説が記されたものがある。[25] 西川が翻刻したものは後者に当たる。

宮城による教歌の撰集・校註より前に遡れば、胤舜の弟子の磯野主馬信元と葭田内膳正清正による教歌もみられるが、鎌宝蔵院流としては、胤舜の末弟に当たる中御門半入胤張によって詠まれた教歌が最も古いと考えられる。胤張は、胤舜の没後、寺嗣の胤清が幼若のため、流儀の後継者となっており、自作の教歌六〇首を歌目録『陽心の巻』の一巻にまとめたとされる。[26] また、胤憲の時代に編まれた『鎗術秘傳和歌百首』と題された歌伝書をみると、三代目の覚舜房胤清の時代に詠まれたとされる教歌が載録されており、胤張のものとも宮城の撰集したものとも一部異なっている。[27] 今後のさらなる調査が必要ではあるが、胤張と胤清の時代にある程度の教歌が出揃い、その後も詠み足されていき、それらを宮城が一七九〇年頃に百首として撰集・校註したとみられる。胤張の自作の教歌は、一部改められている箇所もあるが、『鎌槍兵法百歌首』にも複数含まれており、流派に通底する身体的技術や術技の要諦や意識、稽古や実戦に臨む姿勢や心構えなどを伝えようとする教訓性に富んだものであったことがわかる。以下では、西川の

翻刻に基づいて、その内容を簡単に検討してみたい。

三　『鎌槍兵法百歌首』にみられる教歌

宝蔵院流槍術の特徴を詠んだ歌として、しばしば取り上げられるものに、「突ば鎖なげば長刀ひけば鎌　とにもかくにもはづれざりけり」[28]という一首がある。これは中御門胤張の自作の教歌六〇首に含まれているものであるが、他にもバリエーションがあり、武芸に秀でた百人をそれぞれ和歌と絵をもって紹介した『武稽百人一首』では、「突ば鎗うてば鳶口ひけば鎌　何につけてもがれざらまし」[29]となっている。また、『鎌槍兵法百歌首』をみると、類似の意味合いをもっているが、「きれハ太刀なけハ長刀突ハ鎗徳の多きは十文字鎌」とやや趣きの異なる歌となっている。

これらの歌は、宝蔵院流槍術が用いる鎌槍とその操法の利点を示していることで共通している。この鎌槍は、槍の穂先に鎌と呼ばれる横手があることによって、突くだけではなく、引っ掛けることや擦り込むことなどを可能としており、それが攻防の多様性を生み出し、流派の強みとなっている。しかし、教訓性に重きを置く教歌では、この利点を過信することを戒めるものもみられる。一例として、『鎌槍兵法百歌首』から三首を解説とともに挙げる。

鎌鎗の横手を頼遣ひなはかけはつしての後にくゆへし
　當流の鎌は理方を第一とおく器なれども横手にてかけんおさへん突揚んとするは則住地煩悩なり。
　もしかけはづして後大に悔べしとなり。
横手をはいらさるとして柄にかちのありとつかへハ後に悔まん
　前歌の心をとりそこない横手をはいらざる物とせば、是も亦当流の理方を知らざるなり。柄にかち有事は決してなし。穂さき働らけば柄もこと〳〵く働き法に叶ひて鎌の利は則必勝なり。
鎌も柄も其能あるそ習ひなハ敵のしはざに乗て勝へし
　横手も柄も皆時に應じて能有を知り得たらは敵のしはさ〳〵に乗じて毎く勝有へしとなり。[30]

最初の歌では、鎌を巧みに用いることが流派の基本であるとしながらも、その鎌に頼り過ぎることを戒めている。続く歌では、前の歌の意図を取り違えて、鎌を不要のものとして柄に頼ろうとするのも、流派の強みを失うことになり、流派の基本を理解していないと説いている。そして、最後の歌では、前二首を踏まえて、鎌と柄の双方の利点をよく学び、相手の仕掛けに応じてうまく対応することを示

している。この一連の教歌は、流派の強みを生む鎌槍の利点を意識させ、その操法についての基本となる心構えを教えようとしている。

このような教歌が撰集された『鎌槍兵法百歌首』は、底本の標題では『十文字鎌兵法初心百首歌』となっているように、教歌を通じて、流派として身に付けておくべき、武道や槍術の基本となる操法や心法、流派に通底する術技の要諦や意識、稽古や実戦に臨む姿勢や心構えなどが簡潔に説かれており、それに解説が付されていることによって、定着の効果がより高められている。

この『鎌槍兵法百歌首』に載録された教歌について、一つの試みとして、居合道の教歌の分析で用いられた項目に基づいて分類すると、表1のようになる[31]。流派固有の事柄を取り上げた歌や教授法を説いた歌もみられるが、武道精神・修身自戒・稽古心得についての歌が四七首と約半分を占めている。また、教歌の中に現れる語句からみても、「心」の大切さを説いた歌が三五首と最も多く、経験の浅い者を意識してのことかもしれないが、稽古などを通じて心身両面での「習」の大切さを説いた歌も一四首と比較的多くみられた。精神の修養を促すとともに、修行者の稽古に向き合う姿勢や心構えを醸成することを意図して撰集・校註されていたことがうかがえる。これは、歌伝書が編ま

表1：宝蔵院流槍術の教歌の主題分類

分類項目	『鎌槍兵法百歌首』		『宝蔵院流伝歌』	
	（首）	（%）	（首）	（%）
技法	9	9.0	15	42.9
心法	19	19.0	6	17.1
武器法	11	11.0	5	14.3
戦術	3	3.0	0	0.0
理念	0	0.0	0	0.0
武道精神	7	7.0	4	11.4
修身自戒	24	24.0	3	8.6
稽古心得	16	16.0	2	5.7
作法	1	1.0	0	0.0
教授法	5	5.0	0	0.0
流派	5	5.0	0	0.0
合計	100	100	35	100

（注）：分類項目については、小林勝法「武道歌に見る居合術の理念と技術」（『文教大学国際学部紀要』第14巻第2号，2004年2月）87頁に基づいている。

れた時期には、実戦を経験するような機会がなく、稽古場での活動が中心となり、武術が武士の嗜みとなって、精神性や心法論に傾いていったことも少なからぬ関係があるとみられる[32]。

西川は、『鎌槍兵法百歌首』について、「命をかけたきびしい修行をへた者の、悟の境地、槍の極意でもある。その反面、槍の利害得失を明確に記述し、更には心のおごりを戒めるなど、術理、理合をくまなく網羅している[33]」と高く評価している。これらの教歌は鎌宝蔵院流で伝えられたものであるが、その系派である高田派にとっても、それらが説く内容は流派としての基本を築く上での重要な教えになると考えられたとみられる。また、「歌の内容が、今の時代にも立派に通用する幾多の教訓が豊富に詠まれている[34]」とあるように、教訓性の面から現代的な意義が見出されていたようにも感じられる。最後に、現在伝承されている高田派の歌伝書と教歌にも目を向けてみたい。

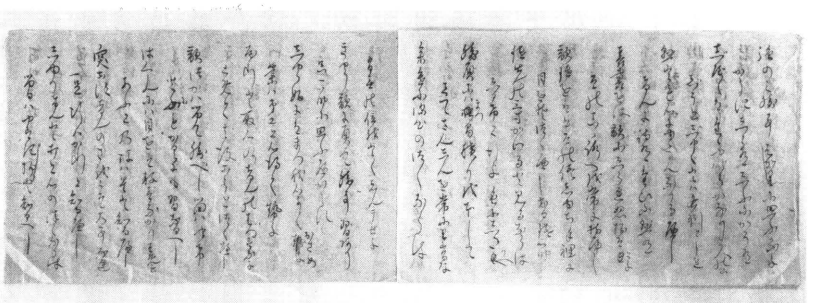
四　宝蔵院流高田派槍術の歌伝書と教歌

宝蔵院流高田派槍術の伝書については、西川源内が翻刻しているものも含め、武道関係の全集や資料集などにいくつも掲載されている[35]。高田派は比較的伝書が整備されていたともいわれており、残存している伝書は多いが、管見の限り、高田派の歌伝書として翻刻されたものはない[36]。そこで、本稿では、高田派の歌伝書を取り上げ、その教歌の部分を翻刻し、現在の伝承活動を踏まえて若干の検討を行ってみたい[37]。ただし、紙幅の都合上、すべての教歌に解説を付して、一首ずつ検討することはできないため、『鎌槍兵法百歌首』で行ったように、教歌の分類を行い、現在での伝承活動に関係する数首を取り上げることにしたい。

しかしながら、本稿では、現在伝承されている江戸伝の歌伝書が利用できなかったため、一七八〇年に横地四郎右衛門重教から志賀六郎に授与された『宝蔵院流伝歌』（筆者所蔵）という会津藩に伝わった高田派の歌伝書を用いることにした（写真2）。会津藩高田派の系譜をたどると、胤栄から中村市右衛門尚政－高田又兵衛吉次－森平三清政綱－竹内六郎左衛門勝重－竹内六兵衛勝辰までは江戸伝と同じであり、伝書の形式・内容は、概ね定まっていたこともあって、江戸伝でも会津藩伝でもほぼ同様であった可能性は高いと考えられる。

また、この『宝蔵院流伝歌』を取り上げるに際しては、前文や教歌など、中村派のものとほぼ同一であるという点にも触れておく必要がある。中村派の歌伝書としては、『宝蔵院流伝歌』とほぼ同時期の一七七〇年に作成された、

写真２：『宝蔵院流伝歌』に載録されている教歌



福井藩の『宝蔵院流印可添状』が確認されており、すでにいくつかの翻刻がある。[38] これらの歌伝書の前文には、尚政が「予若年より南都宝蔵院覚禅房法印について此道を習学し、二十年に及て師の秘奥を極得たり　…中略…三十一字の和歌をつゞり兵術の奥意をあらはす」[39]とある。高田派の祖である高田吉次は中村尚政に学んでおり、系派の祖が師弟関係にあり、尚政直伝の目録形式が中村派でも高田派でも守られたことを踏まえると、尚政の自作の教歌が吉次を経て高田派でも用いられていたと推察される。[40]

なお、翻刻については、底本とする『宝蔵院流伝歌』に載録された教歌のみを対象にしている。翻刻の要領として、行取りは原本のままとしたが、読者の便宜を図るため、通し番号を付し、読みやすさを優先して漢字と仮名を選択し、現行の字体や仮名遣いに改めた。

【翻刻】

① 兵法はまず身の垣を本として
　さてその後に人に勝つべし
② 下手の芸我が身の非をば知らずして
　敵に勝たんと思うはかなさ
③ 勝つ事は表の内にあるものを
　心づくしに奥にたずねる
④ 兵法は心ざしさえ正しくば
　勝つ事さらに疑いぞなき
⑤ 強のみ勝つ事ばかり思うなよ
　剛に柔あり柔に剛あり
⑥ 弱はただ柔らかなりと人の言う
　柔と弱とは格別と知れ
⑦ 懸かるとも心に油断なかるべし
　懸に待あり待に懸あり
⑧ 表裏をば敵にせられぬものぞとよ

その心得を常に持つべし

⑨ 敵槍を取るとそのまま手字手裡に
目をぞ突くべし出ずる槍筋

⑩ 槍先の三寸かわると見るならば
仕掛けて行くよ色に従え

⑪ 勝負にはまず間積りを本として
さて残心を常に忘るな

⑫ 残心に深く心のつくならば
有無の位を得心をせよ

⑬ 強敵に負けて勝つ事習いあり
ただ一筋に思うべからず

⑭ 勝負にはまず我が心よく修め
業は第二と心得てせよ

⑮ やっと取る心の懸を外すなよ
留めてその後ほうと突くべし

⑯ 敵突かば留めて勝つべし留めば突け
とにもかくにも習いなるべし

⑰ 破軍には目をぞ放すな仮初めも
会うての後は星と知るべし

⑱ 突き出だす剣の先こそ大事なれ
一足行かば勝つと知るべし

⑲ 手裡剣を打つと心のつくならば
留むるは易きものと知るべし

⑳ 取り懸かる拍子に三つの習いあり
先持後なりと兼ねて知るべし

㉑ 道具をば何を持っても替わるまじ
心の位上手なりせば

㉒ 兵法は心の上手上手なれ
槍を使わば下手と知るべし

㉓ 手は待に足は懸に緩みなく
行水鳥の心なるべし

㉔ 身の矩と槍の矩と和合わせば
敵の入るべき道はあるまじ

㉕ 業にのみ取り合う程は下手ぞかし
上手と言うは心なるべし

㉖ 猿猴の梢に伝う心地して
手裡に心を留めぬなりけり

㉗ 槍はただ三尺出ずると心得て
その間積りを肝要とせよ

㉘ 手先にて突き出す槍は弱味なり
踏み込み突くも身にて突くべし

㉙ 太刀と槍短きものに長く取り
突かばそのまま負けと知るべし

㉚ 入り身より独り行く身はなきものぞ

色に従い色に突くべし

㉛ 突けば槍薙げば長刀引かば鎌
心の位とにもかくにも

㉜ 扇団のその身の位大事なり
敵に取らればまたは取るべし

㉝ 水月のその際まではいずとなく
さて位ぞちゃっと取るべし

㉞ 軽くなく重くもあらじ遅からず
急ぐ心を悪しきとぞ言う

㉟ 一心の弱なる時は益もなし
習いと功を父母とせよ

『宝蔵院流伝歌』の構成をみると、①から④でまず勝負に臨む心構えを説き、⑤から⑫でやや一般的な範疇での身体的技術の基礎として、動作の強弱・剛柔・動静に触れ、間積もり・色・残心といった相手に対する心身の対応を通じて勝負の機微を教える。⑬と⑭で再び勝負に臨む姿勢を交えながら、修行や稽古の心構えを示し、⑮から㉖で心法を混ぜながら身体的技術を槍術に寄せながら説いている。㉗から㉛では槍術の操法にやや踏み込んで基本を伝え、㉜と㉝で槍術にとどまらない位について触れる。そして、最後に㉞と㉟で修行者に求められる精神性が説かれる。これらの教歌は、あくまでも武技として戦いに勝つことが意識されながら、流派として身に付けておくべき基本的な点が凝縮されているといえる。

この『宝蔵院流伝歌』の教歌の分類を『鎌槍兵法百歌首』と同様に試みると、表1のようになる。『宝蔵院流伝歌』は、技法や武器法に関係するものが多く、三五首のうち二〇首を占めており、心法・武道精神・修身自戒・稽古心得は一五首であった。また、後者のうち修身自戒と稽古心得に関係するものに限れば五首となり、『鎌槍兵法百歌首』に比べて少ないことがわかる。この違いの背景には、歌伝書と教歌が成立した時期の違いがあるとみられる。

『鎌槍兵法百歌首』が宮城化応によって編まれたのは一七九〇年頃であり、泰平の世の中で武士の嗜みとして武術を学ぶ時代になっており、武術が実戦的に役立つものというよりも武士としての覚悟や戦いへの覚悟を培うものとなり、歌伝書も修行や稽古の心構えに力点が置かれるようになったと考えられる[41]。一方、尚政が教歌を詠んだのは、胤栄の下で秘奥を得たという一六一二年頃から福井藩に仕官する一六三一年頃までの間と考えられるが、まだ戦乱の世を生き抜いた者もおり、また大坂の陣もあって未だ武技として槍術を身に付けるという気風も残っており、稽古場での修行や稽古の心構えを説くよりも技法や武器法に力点

が置かれたのかもしれない。

載録されている教歌に現れる語句をみると、やはり「心」にまつわる歌が一六首と多くみられる。例えば、⑭と㉕の教歌では「業」に、㉑の教歌では「道具」にこだわることを戒め、心構えや精神修養の大切さを説いている。また、㉛の教歌は、先にみた宝蔵院流槍術の特徴を表した歌に類似しているが、「心の位」と結び付けて詠まれているところに違いがある。槍術は武技であるが、単に身体や実技の修練を追求するだけでは、より高いレベルに達しないことや戦いに勝つことが難しいことが示唆されている。これらの教歌は、具体的な方法を伝えるものではないが、精神の修養に取り組む姿勢を涵養するものであったといえる。以下では、現在の伝承活動にとって意義深い教歌を中心にみていくことにする。

まず、㉗と㉙の教歌であるが、これらの歌は、現在の伝承活動の中で、槍の利点を改めて認識させるものとなっている。すでに触れた通り、現在の宝蔵院流高田派槍術では鎌槍対素槍の槍合わせの型が伝わるのみであり、日々の稽古では、長柄の槍と向き合うことが中心となり、それ以外の太刀のような短い武器と対峙する機会は少ない。大阪宝蔵院流槍術では、太刀合わせの型を復元し、日々の稽古にも取り入れているが、実際に槍対槍の型稽古に慣れていると、太刀に対する間合の取り方や技を仕掛けるタイミングなどに違和感を覚えたり苦労したりすることも少なくない。これらの教歌は、太刀のような短い武器と対峙する際に、槍の長さを生かして自らの優位とする意識や、間合を詰められた場合には長柄故に不利となるため、その長さを過信せずにしっかり間合を見定める意識など、現在の伝承活動の中で得ることが限られた経験や希薄になりがちな意識の大切さを認識させるものとなっている。

次に、⑤から⑦の教歌であるが、これらの歌は、身体的技術の基礎として動きの緩急・強弱・剛柔・動静の大切さを説いている。現在の伝承活動では、型稽古が中心となり、決められた手順や動きを追うことに意識が向かいがちである。これらの教歌は、相手と対峙する中での一つ一つの動きの強弱の加減、緩急や剛柔の変化、動静の間を意識させるものであるが、現在の伝承活動にとっては、単に型の手順のみを追い、漫然とした型稽古を行うことにならないように自戒を促すものにもなっているといえる。しかしながら、これらの歌で説かれる強弱の加減、緩急や剛柔の変化、動静の間などは、定量化・文字化して伝えるには限界のある非言語的情報でもあるため、型の理合を正しく理解した上で、稽古を通じて感覚を共有しながら身に付けていく必要がある。

また、⑩と㉚の教歌では、「色」について触れており、相手の動きや気配を感じ取り、それに合わせて動き、勝ちを得ることを説いている。型稽古では、手順や動きが決まっているために相手の次の動きが分かり、相手の「色」を捉える意識が希薄になることがある。現在の宝蔵院流高田派槍術では、相手の素槍の仕掛けに対して、それを鎌槍で受けてから相手を制する、いわば後の先を取って勝つ型がほとんどであり、日々の稽古でも指導されることではあるが、相手の動きをよくみて、その起こりを捉えて自ら動き、相手を制する技を掛けることが重視される。そのためには、相手の動きだけではなく、気配も含めて「色」をしっかり見極めることが基本となるが、これらの教歌は、その基本の大切さを再確認させるものとなっている。

槍術は現代の戦闘術としては役目を終えており、また現在の宝蔵院流高田派槍術では型稽古が中心となっているため、予定調和的な動作の修練と習熟になりがちであり、相手と対峙する中での動作のもつ一つ一つの理合や心構えを考えたり学んだりすることがおろそかになる恐れがある。しかしながら、あくまでも武道として存在する以上、これらの教歌が説くような基本と心構えを身に付け、さらにはどのような相手にも対応できる実践力や応用力へと高めるべく、修行や稽古に臨むことが必要であると思われる。歌伝書や教歌は、その教訓性と精神性を積極的に評価することによって、流派の基本や心構えを再確認・再認識する手掛かりになり得るといえよう。

おわりに

武道は、日本の運動文化を体現する無形の文化遺産といえる。現代武道では、日々の稽古を通じて、身体能力や技術を磨くだけではなく、精神を修養し、試合や競技を通じて、勝負に臨む姿勢や心構えを学ぶことになる。古武道でも、日々の稽古を通じて、術技や型といった実技を修練するとともに、各流派が重視してきた精神面の修養を行っており、実技・口伝・伝書などの様々な方法を駆使しながら、世代を超えて伝承されている。しかし、古武道は、現代武道と異なり競技性が弱く、また現代的な問題として社会規範や生活様式などの変容もあって、各流派が重視してきた精神性や教訓性が後退していくことも懸念される。武道を文化遺産と位置付けるのであれば、実技以外にも、それぞれの流派が重視してきた精神性や教訓性についても合わせて伝承していくことが必要である。

現在の宝蔵院流高田派槍術は、すべての術技や型が伝わっておらず、流派の精神性や教訓性も完全な形で残っ

ているとはいえない。本稿で歌伝書や教歌を検討したのは、失われた精神性や教訓性を取り戻すということではなく、それらの面で現在の伝承活動にとってどのような意義を見出せるのかを考えることにあった。本稿で取り上げてきた歌伝書や教歌は、具体的な技術論や精神論というよりも、やや抽象的なレベルでの精神性や教訓性を説くものであり、経験の浅い者も念頭に置きつつ、一見するとごく当たり前ともいえる修行や稽古の基本的な内容を分かりやすく伝えようとするものであった。分かりやすいが故に、それらを実践しようとすることは容易なように思われるかもしれないが、実際には一度や二度読んだ程度で身に付くようなものではなく、反復的かつ意識的に稽古を行うことによって、教歌の内容を正しく理解できるようになり、それらが身体に浸み込むように身に付いていくようになる。その意味では、やはり稽古という場が重要となるが、このような歌伝書や教歌を稽古の効果を高める補助的なものとして、伝承活動に役立てることを模索してもよいのかもしれない。教歌を活用している流派もあるが、特に伝承が途絶えかけた流派にとっては、流派の精神性や教訓性に向き合う貴重な手掛かりになると思われる。

注

（1）渡辺一郎「武芸・修行」（北原進編『日本古文書学講座　第八巻　近世編Ⅲ』雄山閣出版、一九八〇年）一八四頁。武道史研究の資料としては、この伝書の他に、入門時に提出した誓紙・起請文、目録や印可などの伝授段階を認定した証状・伝授状、流派の伝系図、自己の体験や見聞を集めたものや術理に対する意見をまとめたものなど、様々なものがある。

（2）近世の各流派では、流派外への技術の漏洩を防ぐために伝書の公開や他流試合などが厳しく戒められ、技術面の重要ないし微妙なポイントは、口伝として真に伝えるべき人にのみ伝承するということが一般的であった。これによって流派の純粋性が保持されていたが、一八世紀末から次第に秘密主義は後退していった。伝書についても、現在では、その授与者から子孫や後継者へと相続されていく中で、博物館や図書館に寄贈されたり、古書市場に流通したりすることによって、流派外の者でも利用できるようになっている。

（3）例えば、剣術では、朴周鳳・魚住孝至「新陰流の組太刀の研究―柳生家伝来の古文献と伝承の形に基づいて―」（『国際武道大学研究紀要』第二〇号、

二〇〇四年）、槍術では、石川哲也「現伝承の宝蔵院流高田派の術技と伝書に記された術技の差異についての研究」（『関西武道学研究』第二三巻第一号、二〇一四年三月）などがある。

（4）例えば、剣術では、吉田鞆男・魚住孝至「『三学』組太刀試論」（『武道・スポーツ科学研究所年報』第一〇号、二〇〇五年）、槍術では、前田繁則・小寺直樹・平野恭平「民俗文化・古武道としての槍術の伝承・復元のあり方―大阪宝蔵院流槍術の取り組みを中心に―」（『近畿民俗』第一八七号、二〇二一年三月）などがある。

（5）前掲渡辺「武芸・修行」一八四頁。

（6）例えば、魚住孝至「宮本武蔵『五輪書』の思想」（『ｉｉｃｈｉｋｏ』第一一二号、二〇一一年一〇月）、中野寛美「柳生宗矩の「兵法家伝書」における剣術思想」（『年報日本思想史』第五号、二〇〇六年三月）などがある。

（7）大森宣昌『武術伝書の研究　近世武道史へのアプローチ』（地人館、一九九一年）五頁。

（8）今村嘉雄編『武道歌撰集　上巻』（第一書房、一九八九年）ｉ頁。

（9）石塚修「利休教歌の系統と展開―百首歌を中心に―」（『文藝言語研究　文藝篇』第五二巻、二〇〇七年一〇月）二一頁。

（10）前掲今村『武道歌撰集　上巻』ｉ頁。例えば、『上町寶藏院鎗術目録聞書』（寛政頃、東京国立博物館所蔵）では、それぞれの術技や型の解説の中に教歌を取り入れ、理解と定着を促そうとしている。

（11）教歌の研究としては、小野恭靖「如雲舎紫笛『いろはうた』小考」（『大阪教育大学紀要　第Ⅰ部門』第五六巻第二号、二〇〇八年二月）、土井大介「忍歌の来歴―道歌集「伊勢三郎義盛忍百首」と忍術伝書『万川集海』を中心に―」（『三田國文』第三四号、二〇〇九年一月）などがある。なお、教歌ではないが、現代の歌人である小島なおが、居合道の心を短歌で詠んでいるのも興味深い試みである。詳しくは、小島なお「短歌の韻律と居合のしらべ　刀の間合いで世界を詠う！」（『月刊秘伝』第四〇五号、二〇二一年八月）を参照していただきたい。

（12）前掲土井「忍歌の来歴」一五頁。

（13）石塚修「『道二翁道話』における韻文利用について―音声言語の場への古典応用の実態―」（桑原博史編『日本古典文学の諸相』勉誠社、一九九七年）六七六頁。教歌については、美的表現を意図したも

のではないため、文芸的には拙劣な歌や無残な歌などといった厳しい意見もあるが、教訓を記憶しやすいように教育面で役立てたことを考慮すれば、十分に評価することができる。

（14）前掲石塚「利休教歌の系統と展開」二四頁。

（15）前掲今村『武道歌撰集　上巻』ⅳ頁。

（16）小林勝法「武道歌に見る居合術の理念と技術」（『文教大学国際学部紀要』第一四巻第二号、二〇〇四年二月）八七～八九頁。

（17）講談社編『日本の武道　用語集〈付〉武道歌選』（講談社、一九八三年）一九二頁。

（18）同右、一九九頁。

（19）生田久美子「「わざ」の伝承は何を目指すのか―TaskかAchievementか―」（生田久美子・北村勝朗編『わざ言語　感覚の共有を通しての「学び」へ』慶應義塾大学出版会、二〇一一年）一五～一八頁。稽古は、非言語的情報を伝達する場でもある。例えば、型での間合・拍子・呼吸といった定量化・文字化が困難な非言語的情報は、稽古という場で感覚を共有することによって伝えられるものであり、稽古を欠けば失われることになり、一度失われると取り戻すことは極めて難しいものである。

（20）前掲前田・小寺・平野「民俗文化・古武道としての槍術の伝承・復元のあり方」二〇頁。術技や型を復元しようとする場合、伝書から動作や手順を読み解き、判然としない部分については、復元者が身に付けている実技や経験をもって補うことがみられる。伝書から術技や型を考証する上では、文字として残されたものを比較することを通じて動作や手順は確定することができるが、文字化できない要素を欠いているという限界がある。そのため、復元された術技や型は、現在の経験と知識に基づく仮説であるともいえる。

（21）宝蔵院流高田派槍術の伝承過程については、同右、二〇～三〇頁を参照していただきたい。

（22）前掲石川「現伝承の宝蔵院流高田派の術技と伝書に記された術技の差異についての研究」二五頁。

（23）伝書の翻刻としては、西川源内『宝蔵院流十文字鎌槍傳　鎌槍兵法百歌首』（財団法人奈良市武道振興会、一九七七年）、西川源内『高田又兵衛伝　宝蔵院流十文字口伝書　久世大和守廣之著述』（財団法人奈良市武道振興会、一九七九年）、西川源内『宝蔵院流十文字鎌目録之事　武道極意』（財団法人奈良市武道振興会、一九八〇年）がある。これらの成

果は、後に財団法人奈良市武道振興会編『奈良の宝蔵院槍術』（財団法人奈良市武道振興会、一九八九年）に再録されている。

(24) 島田貞一「宝蔵院流槍術」（島田貞一・今村嘉雄・齋藤聰『日本武道体系　第七巻　槍術・薙刀術・棒術・鎖鎌術・手裏剣術』同朋舎出版、一九八二年）一八頁。宝蔵院流槍術の伝書についていえば、系派によって異なるものがみられる。また、伝書は、作成者の意識が時代によって異なるため、内容が取捨選択されていることもある。そのため、系派による違いや作成された時代を包括的に捉えて検討することも必要である。

(25) 教歌のみであれば、『十文字鎌兵法　家元諸傳秘録全』（一八五九年、奈良県立図書情報館所蔵）に載録されている他、前掲今村『武道歌撰集　上巻』四一〇～四一八頁、沼田鎌次『日本の名槍【復刻版】』（雄山閣、二〇二一年）二二五～二二九頁などにも掲載されている。一方、各首の解説が記された歌伝書としては、西川源内が用いた満田家所蔵のものの他に、『宝藏院鎌十文字百首乃哥』（作成年月不明、大阪市立大学学術情報総合センター所蔵）もある。

(26) 渡邉一郎『鎌宝蔵院槍術』（奈良市、一九八一年）三六頁。胤張の教歌は、胤舜の没後ということを考えると、一六四八年以降に詠まれたとみられる。

(27)『鎗術秘傳和歌百首』（胤憲の時代に作成されたものと推定、筆者所蔵）。この歌伝書は百首と題しているが、八七首と別歌一首の計八八首のみが収められている。

(28) 前掲渡邉『鎌宝蔵院槍術』三六頁。

(29) 笠亭仙果編『武稽百人一首』（一八五三年）。

(30) 前掲西川『宝蔵院流十文字鎌槍傳　鎌槍兵法百歌首』三二頁。

(31) 前掲小林「武道歌に見る居合術の理念と技術」八七頁。同論文では一首につき二項目まで分類しているが、本稿では一首につき一項目のみとした。主題の分類項目は、身体的技術の「技法」、精神的技術の「心法」、武器の操法の「武器法」、戦い方の「戦術」、武道の「理念」、武道一般の「武道精神」、修行生活を行う上での「修身自戒」、稽古を行う上での「稽古心得」、礼法や武器の扱い方などの「作法」、教え方の「教授法」、流派固有の事柄の「流派」の一一項目である。

(32) 魚住孝至『日本の伝統文化六　武道』（山川出版社、

二〇二一年）八八頁、一〇五頁。

（33）前掲西川『宝蔵院流十文字鎌槍傳　鎌槍兵法百歌首』三七頁。

（34）同右、三七頁。

（35）宝蔵院流高田派槍術の伝書としては、例えば、型の手順や要諦を簡潔に示した久世広之による『鑓秘書』が、西川源内による翻刻の他に、前掲島田・今村・齋藤『日本武道体系　第七巻　槍術・薙刀術・棒術・鎖鎌術・手裏剣術』二二〇～二三五頁、野田市史編さん委員会編『野田市史料集　第七集　野田郷周辺（野田・関宿・栗橋・古河）史料』（野田市役所、一九七五年）二一七～二二八頁などにも掲載されている。

（36）平上信行編『極意相傳　第二巻』（愛隆堂、一九九四年）四二頁。

（37）横地四郎右衛門重教『宝蔵院流伝歌』（一七八〇年、筆者所蔵）。

（38）前掲今村『武道歌撰集　上巻』三八五～三九〇頁、今村嘉雄編『日本武道全集　第六巻　槍術・薙刀術・棒術・他諸術』（人物往来社、一九六七年）三八～四五頁。

（39）前掲今村『武道歌撰集　上巻』三八六頁。

（40）前掲島田「宝蔵院流槍術」二一二頁。なお、『宝蔵院流伝歌』は、『宝蔵院流印可添状』に比べて載録されている教歌が二首少ない。欠脱している二首は、【翻刻】の⑫と⑬の歌の間に続けて入っており、順に「行水のながれはおなじすゑなれど　よどむによりてあらせとはなる」、「勝負にはふたつの外はなきぞかし　有無の拍子をかねてしるべし」という歌である（前掲今村『武道歌撰集　上巻』三八八頁）。この欠脱については、教歌の内容から意図的なものではないと推測される。

（41）前掲魚住『日本の伝統文化六　武道』七〇～七一頁。

［付記］

本稿脱稿後、二〇二一年一二月に九州大学附属図書館記録資料館が所蔵する『歌之巻』（三奈木黒田家文書四八〇三―三）を閲覧する機会を得た。同資料は、福岡藩に伝わった高田派の歌伝書（作成年月不明）であり、会津藩の高田派のものと比べると、欠脱している二首があることと、翻刻⑬の一首が欠けていることを除けば、前文を含めてほぼ同じであった。本文中で触れた通り、高田派では中村派と同じ歌伝書が用いられていたとみてよいと思われる。